



【福岡いのちの電話】に寄せて

「福岡いのちの電話」理事

五十嵐 実

(株式会社福岡住宅センター 代表取締役社長)



人は自発的に他者のために奉仕をするという場合、如何なる心情で動くのだろうか。何かしらのきっかけがなければ、大半の人は、自らのことに一杯一杯で日常を過ごしていると思われまます。

我々のこの「福岡いのちの電話」での役割が、ある方は相談員や事務局員として、または評議員や理事などの役員として関わる理由は、各人さまざまの動機や経緯があろうかと思われまます。

いずれの部署も支えあいながら、結果として30年以上運営されてきたという事実は重い。これまで継続されてきたことは、一方でこの地に必要であり続けて根を下ろしているということでしょう。それは、近年、国内での自殺者が最悪時の3万人を割り、歯止めがかかったと言いつつも、まだまだ社会の歪み、病理的生活や虐待を強いられ、実社会に絶望し自死を思い立つ環境に身を置くしかない人々が確かにいるということでもあります。

自死という現実に関心を痛め、自死を思いとどめる方策はないものかと思いを募らせ、「それならば私の一助を」と手を差し伸べてこられた方々の集まりが「いのちの電話」であるといえます。

10年ほど前、私が福岡鶴城ライオンズクラブに在籍後16年目に会長を務めるようになった時のことです。それまで35年間、当クラブがさまざまな金銭及び労力による支援活動を行っている支援先の見直しを、当時のクラブ三役で行うことになりました。この先継続していくべきかどうかを一度洗い直そうということでした。それにはまず、全ての現場をよく知るために訪問

させていただくこととし、今から先は新たな支援先の選定も含め、肌で感じて決めようということになりました。そこで、真っ先に伺ったのが、この「福岡いのちの電話」でした。

当クラブメンバーで、15年程前から諸先輩の方々が自ら「福岡いのちの電話」の理事として、既に関わっておられました。三役で訪問した現場では、ちょうどブースを現在の様式に改めようと言われておられ、ブース内で何人かの相談員が熱心に電話を取られていました。24時間365日、当時は約250人の相談員の方が毎月2回担当され、さまざまな相談をローテーション表によって輪番で受けられていると説明されました。

当時国内では、年間3万人を超える自殺者がいました。今にも命を絶たんとする人達に電話という窓口で粘り強く心を砕いて熱心に寄り添う。通話者の逼迫した思いをじっくりと受け止め、自死を思う多くの人の声と心を聴く。このように寄り添うことで通話者自らが、次第に自分自身に気づき確認をしていく、という事務局の方の説明に深く感銘を受けました。「この『いのちの電話』は、今からも支えていかねばならない」と三役は心しました。拙くもその後、成り行きとはいえ、私自身が役員を拝命してしまっている次第です。

自死を思い立つ人たちに、この組織の電話番号をいかに知らせ、ダイヤルを回していただくようにするか、広報活動を含め運営資金の調達、相談員の確保・補充等問題は山積しています。皆様の後ろの方から老体ながらも応援させていただきたいと思っております。